京都新聞（夕刊）　2007年（平成19年）10月15日　月曜日

その5　製材所から学ぶ

木林学のスズメ

ヒノキを挽いて板にする作業を見つめる見学者たち。手前の男性が、板を受け止める「はなとり」という作業をする（上）。ペレット製造機に製材作業で出た端材を入れる子どもたち（京都市南区・いずれも岡田材木店）

中川 典子

年輪が映す地球温暖化

「挽き粉が舞い上がり、次々と一本の丸太から形の違う材木が出来上がる。高校生の時、その様子はものすごく不思議な感じがしました。僕が、製材師にけりたいと思ったのは、製材という何とも言えない憧れをやってみたかったのだと思います」

昭和二十九年創業の岡田材木店の岡田和也さん（29）は、製材見学に訪れた人々に、そう語りかけました。

京都府内には、今、約三十軒の製材所があるだろうと言われていますが、製材機を毎日稼動させているところは五～六軒と聞きます。特に、街中の製材所は、騒音や挽き粉の問題や、原木の搬入や保管などが難しいところに、木材の製品化により、特定の材料を作らなくても良い状況が成り立っているため、激減しているのが現状です。

もうひとつ、温暖化によって、かつては三十年や四十年かけて育っていた大きさに、今は二十年ぐらいで育ってしまうことが、木材の世界では大変深刻な問題になっています。年月をかけて大きくなる年輪が、温暖化によって、急速に大きくなる。夏の季節が長くなり、冬目よりも夏目が極端に成長して年輪の幅が広くなる。そうして、昔よりもやわらかい木質の木材ができ、太っている割には見掛け倒しで、製材時の挽く感触がサクサクになってきたそうです。

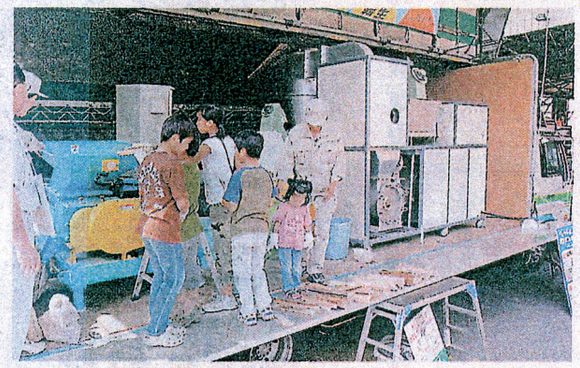
こうした丸太の状況が価格を下げ、伐採の費用や運搬、植林の費用を考えると、採算が見込めなくなってきました。京都府内の山々でも、伐採後の枝や葉を山に捨てて、荒れ果てたままというところもあります。

今月七日、ペレットづくりワークショップの製材見学として製材所を訪れた子供たちは、真剣な眼差しで見つめていました。本物の技術と昔、岡田さんが感じたような自然が与える神秘さを感じ取っているようでした。

荒廃した山々はすぐには元に戻せません。次世代に残すべき地域の自然環境とその循環とはどのようなものなのか。そして素材を見極め、木のある暮らしに取り組む製材所や材木屋との連携が急を要する気がしてなりません。

（銘木業見習）

木質ペレットを燃料とするペレットストーブ



木質ペレット

典子はんのポイント

石油、石炭などの化石燃料がいずれ枯渇することや温暖化の問題の中で、身近な燃料であった木が、エネルギーとして再び注目されています。

今月七日に、京都市南区の岡田材木店で「京都の木質資源の利用を考える会」によるペレットづくりワークショップが開かれました。府内産材や製材所の見学後、木くず、挽き粉、樹皮、間伐材などを材料に木質ペレットを作ったり、ペレットストーブでつくった焼きいもを楽しんだり、というエコロジーイベントでした。

木質ペレット　資源有効利用へ新しい可能性

木質ペレットとは木の粉を固めてできた燃料で、欧米では暖房や給湯に広く普及しています。日本でもオイルショックのころに利用されていたそうです。木質ペレットは長さ約二㌢、直径六・五㍉というドッグフードのような円柱固形で、専用のストーブで燃やすと最初は炎が上がり、やがて熾火となり、砂のような灰が少し出ます。

ペレットストーブを学校や図書館などに取り入れている他府県の自治体もありますが、京都議定書を掲げる京都では、残念ながらペレットはまだまだ「無名の存在」のよう。ペレットの原料は製材時に発生する挽き粉や端材で、木材の有効利用にもつながります。まだ研究段階とはいえ、ストーブだけでなく、バーベキューのできるペレットグリル、パンやピザを焼くペレットバーナー、ペレット足湯などの周辺機器が増えてきました。木質資源活用の新しい可能性が見つかりそうです。

メモ　今回のワークショップで作った木質ペレットは、11月10日午前10時から午後4時まで、京都市左京区百万遍の知恩寺である森の文化祭「火の市」で、足湯を沸かすのに使われる。木質ペレットなどについての問い合わせは「京都の木質資源の利用を考える会」事務局のHibana☎075（1002）2109またはhttp://www.hibana.co.jp

次回は11月5日に掲載します。